

小学校・幼稚園教員養成のためのピアノ指導法（４） ピアノ教材の効果的な学習方法

竹内 アンナ

Guidance for Piano Lesson Methodology for Students in Elementary and Kindergarten Education Courses : Effective Guidance in Learning the Piano

Anna TAKEUCHI

ピアノを学ぶ人を対象として指導が行われる場合、バイエルピアノ教本を教材に指導されることが多い。本学でも、1年次前期初めから、全学生にこの教材から課題を提示し、ピアノの授業を進めている。ピアノの練習に励む学生を指導して感じることは、幼少期からのピアノ学習経験の有無に拘らず、進度および演奏の良し悪しに大きな差が生じることである。そこで、学生が曲を仕上げる過程で正確な譜読みが行われず、表現および技巧の面で、不合理な捉え方による演奏の問題箇所を取り上げる。そこから、問題点の要因を捉え考察し、効果的な練習及び演奏方法を述べる。

1. はじめに

多くの学生を指導する中、ピアノの学習体験が少ない学生は、表現や技術面において曲にマッチしない無駄な動きや不合理な指の動きで演奏をしていることが多い。学生はそのことに気付かずに練習を続けることから、ピアノの上達に遅れが生じることが予想される。さらに、その状態で弾くことが長くなればなるほどその演奏が習慣化されることとなり、却ってその後の指導に支障が生じ円滑に進めることが困難となる。

そこで問題と思われる演奏箇所を教材別に取り上げ、一人ひとりの問題点を分析し、さらにそこを起点に問題を引き起こす要因を捉える。

如何にしてなめらかで合理的な演奏に導くことができるのか、私のこれまでのピアノ指導を通して考えられる様々な考察から、その修正に向けての学習方法を述べる。

2. 要因とその演奏法について

バイエル53番



拍子記号は4分の2拍子であるが、4分音符を1拍と数えるのではなく、8分音符を一つずつ丁寧に意識することに重点を置くことが望ましい。1～3小節にかけて、右手の8分休符が短くなり、次の8分音符が長くのびがちになる。そこで、8分休符と8分音符を（イチ・と・ニ・と）と、声に出して歌いながらそれに合わせて一音ずつ弾くと均等で正確な拍が得られる。5小節～7小節目も同様である。

バイエル57番

この曲は4分の3拍子であるが、一拍目の8分音符2つのリズムが崩れて16分音符と付点8分音符のリズムになり易いので気を付けること。

57番においては、1拍目の8分音符2つと同じように左手4分音符2つを8分音符と捉え、4分の2拍子のような演奏になることが多い。ここでは、4分音符1つと8分音符2つが等しいことをしっかり理解することが大事である。

Allegretto.

57

f

p

Piano. (ピアノ 弱く)

バイエル60番

Comodo.

60

mf

cresc.

dim.

60番では、7・15・23小節のタイの記譜とその意味をよく理解する。タイはスラーによって同じ音でつながる2つの音は、後の音を繰り返し弾いてはいけない。前の音をそのまま保持し、スラーでつながる2つの音の次の3つ目の音から弾くことをしっかり守ることである。

9～16小節は、その前後のやや暗い雰囲気の中調の曲から、明るい雰囲気の長調に変わったことに意識が行くように、問いかけながら説明をすることもよい。

バイエル62番

Allegro moderato.

右手、左手共に8度(1オクターブ)の跳躍が繰り返されるため、手を移動させる幅がかなり広くなり弾きづらい。1オクターブの手の移動がすばやく行われず、小節間に僅かながら時間的な間が起きる。また、テンポが乱れることにより、演奏に滑らかさが欠け、全体に

ぎこちなさが感じられる。指の移動に慣れるまでは、片手ずつかなりゆっくりとしたテンポで練習することが望ましい。繰り返し練習していると、1オクターブの移動の幅を身体が覚えてくるので、手の移動が楽になり、無駄な力が抜けてくることが実感できる。

10・12小節の音符の上の記号8 (ottava) は、楽譜に書かれている音より1オクターブ高い音で演奏する意味であることを理解する必要がある。鍵盤の位置としては、2小節目・4小節目と同じであることも併せて確認し理解ができることよい。

17・18・19小節では、ト音記号とヘ音記号が交互に出てくる。楽譜だけを見ていると、あたかも17小節より18小節の音が低いように錯覚するが、実際は、18小節の音の方が1オクターブ高いのである。譜読みを間違えないように十分に注意する必要がある。ここでは、ト音記号で表す音と、ヘ音記号で表す場合の音との相対関係を正確に把握することが大切である。

バイエル65番



ハ長調音階の練習にもなる曲だが、ここでは指のくぐりに慣れることが大切である。指のくぐりに馴染みがない学生は、利き指である1（親指）と2（人差し指）の指ばかりを繰り返して弾くことが多いが、ここでしっかりと指のくぐりを習得しなければいけない。

右手1小節目、3の指から1の指へのくぐりは、中指をやや立てるように保ちながら、肘を軽く右外側に出し、親指が中指の下をくぐるようにして指を移動させる。

右手2小節目は、1の指から3の指へ指またぎを行う。ここでの指またぎは、親指をやや左に傾けながら、中指が親指の上をまたぐように指を回して移動させる。

左手3小節目、1の指から3の指への指またぎは、親指をやや右へ傾けながら、中指が親指の上をまたぐようにのばして移動させる。

左手4小節目、3の指から1の指への指くぐりは、中指をやや立てるように保ちながら、肘を軽く左外側に出し、親指が中指の下をくぐるようにして指を移動させる。

5小節目以降もくぐりは同様にして行うが、肘を外側に出す動作では自然な動きとなるよ

うに、力を入れすぎないことが大切である。右手も左手も指くぐりや、指またぎの箇所は指の置き換えを間違えやすいので、片手ずつ確認しながら練習する必要がある。また、12・13・14・15小節の反進行のところは特に演奏しづらいので、丁寧に繰り返し練習を行う必要がある。

15小節目の初めの4分音符（ハ音）については、8分音符と捉える学生が多い。音が短くならないようにするためには、4分音符と8分音符の長さの区別が充分認識できる譜読みの力が必要である。

バイエル72番



ここでは3度音程の重音の連続演奏が非常に困難であることから、右手・左手共にその箇所では縦2つの音がずれる傾向にある。

1小節目左手、ト音5の指、ロ音3の指での重音のところは、中指をやや手前に丸めるようにして小指との長さを揃えるような感覚で2つの指を同時におろすとよい。また、1拍ごとに単音のニの音の親指が鍵盤から離れてしまい音がつながらない。やはり音が切れるために、右手4分音符3つのニ音も左手の動きに連動してしまい、レガートに演奏されず短く切れてしまう。修正するためには、左手2つ目親指のニ音を弾いた瞬間に右手ニ音を鍵盤から離し（但し左手ニ音は鍵盤を抑えた状態）、そこから2拍目の音を左右同時におろすように弾くとよい。これを連続繰り返し練習することである。

9から12小節までは、左手の音が右手伴奏の重音に消されてしまうことがないように左手のメロディの響きを感じることが大切である。

バイエル75番

2小節目左手第1音が黒鍵から始まることから、ここで弾き直しをする学生が多くみられる。原因として考えられることは、黒鍵から次の白鍵に下がるこの2つの音に指をおろす時、

指先に不安定さを感じるためと考えられる。さらに3つ目のハ音で直ぐ指くぐりをするので指の動きに戸惑うのであろう。ここはゆっくりと何度も練習を繰り返し、指の動きに慣れることが必要である。



7小節目は右手と左手が上行・下行・平行移動など複雑な動きになるためつまずくことが多い。片手ずつの練習を行い、慣れたら左右合わせて演奏するという学習方法を行うとよい。

14小節目左手、2拍目の2分音符が出遅れるので、15小節目の2分音符・4分音符の形と区別ができるように、音符の長さについてもしっかりと認識を持つことである。

3小節目左手、8小節目右手、16小節目右手はいずれも2分音符である。付点2分音符の長さとならないようにしっかり見分けて、3拍目の4分休符では鍵盤から指を浮かせるように意識することが必要である。

バイエル77番



8小節目左手、第3拍の8分音符2つが出遅れ、右手ハ音と揃わず、ずれる演奏が多くみられる。8分音符、4分音符、2分音符各々の長さの相対関係をここで理解することが必要である。

16小節目左手、タイの記譜とその意味を理解することが必要である。あわててト音を2度鳴らさないように注意しなければならない。

最後の小節左手、4分休符を決して見落とさないように、3拍目は必ず鍵盤から指を浮かせるようにして弾くことである。

《ブルグミュラー 25のやさしい練習曲より》

2番 アラベスク

3小節目右手、4つの16分音符のところでは、指が均等に動くことが難しく弾きづらい。4番目の音が短くなり、次の2拍目の8分音符に転んでしまう。その原因として考えられることは、4の指（薬指）が3の指（中指）より短く、また力が入りづらいために4の指の支えが弱いことにある。平均に音を響かせるには、次の練習方法も有効かと考えられる。4小節目の音列で言えば、イ音・ロ音の2つの音を1つのまとまりと捉え、次のハ音・ニ音・ホ音の3つの音をまた1つのまとまりと捉える。2つのまとまりをそれぞれ個別に数回練習したのちに2つを前後つなげて演奏すると、均整のとれた響きが得られる。

Arabesque

アラベスク

Allegro scherzando ♩ = 152

2.

p

p leggiero

cresc.

f

sf

dim. e poco rall.

in tempo

p

cresc.

p. dolce

ten.

risoluto

f

7・8小節目では、右手8分休符が十分に取れずに休符の後の次の音が早く出てしまい詰まったように聞こえる。この曲は4分の2拍子であるが、慣れるまでは4分音符1拍を8分音符2つに分けて、1拍の間をリズム打ちや声掛けをして細かく拍を取りながら練習すると、バランスのとれた安定した演奏となる。

12～17小節目左手、4つの16分音符と2拍目8分音符についても、先ほどと同様に、2つと3つの音に分けて練習した後につなげて演奏することでがバランスのよい響きが得られる。

18・19小節目は、右手、左手共に指使いの扱いに戸惑うが、初めはゆっくりと1音ずつ確かめながら弾くことで演奏にも慣れる。またここでは、dim. e poco rallの用語を理解することが大切であり、表現を付けることの楽しさを感じながら演奏することも大切である。

31・32・33小節では、1オクターブ以上の跳躍が繰り返されるため、手を正確に移動させることが難しい。左右の手の動きがほんの数ミリ間違っても音のミスが生じるので、ここはゆっくりと練習をしなければならない。何回も手の移動練習を繰り返すうちに、身体が自然に鍵盤の場所を感覚的に覚えるようになる。さらには、指が正確な鍵盤の音の位置におろすことができるようになってくるのである。

速度は、♩ = 132であるが、ピアノを専門としている人を除いては、学習者がそれぞれに演奏可能な速さを決めて良いのではないかと思う。指定の速さで無理な演奏をすることによって、リズムに正確さを欠き不安定な演奏になることはむしろ避けるべきである。

5番 無邪気

2小節目右手、2つの8分音符が、1小節目の16分音符の流れの感覚で演奏することから、速くなって音が短く詰ってしまう。ここは、16分音符2つで8分音符1つと等しい長さであることを理解し、同じように4・7小節目も拍を正確に刻んで弾かなくてはいけない。

7小節目は、8分音符の4つの音がつながらないように、1拍ずつはっきりと指を上げて3拍が明確になるように弾くことである。

12小節目から14小節目2拍目までは、バイエルピアノ教本62番の学習を参考にしながら、1オクターブ上の鍵盤を弾くことを理解する。

14小節目から最後の小節までは、下行、上行のやや長い音階の中での指の置き換え、および指くぐりを繰り返すところなので、弾きづらい。スムーズな演奏とはいかないので、困難な箇所は、部分的にゆっくりと何回も繰り返し練習する他上達の近道はないと思う。最後の音は2オクターブ下がっているため正確な鍵盤の位置に指をおろすことが難しい。練習方法としては、鍵盤の位置を目でよく確認してから指をおろす弾き方を繰り返すことである。

Innocence

無 邪 気

Moderato $\text{♩} = 112$

5. *p grazioso*

cresc.

dimin. *p leggiero*

cresc. *f*

dimin. *cresc.*

曲の前半は、GRAZIOSOで始まっていることから、やさしくなめらかな指の動きと優美な音色で演奏することであるが、後半は軽やかな指の動きと共に軽快な響きを得られると一層この曲の楽しさを感じることができる。

3. 結びに

ここに取り上げた教材は、初歩のピアノ学習者が学ぶ曲であり、どの曲についても初歩の段階での多くの学生に共通する問題であった。また、本学で学ぶ学生の中には、子どもの頃からピアノの学習経験があり、教材楽譜の譜読みが早くできる者もいるが、楽譜に書かれていることを正確に表現できるかと言えば、その半数近くの学生は不完全である。

では、初心者の学生は別として、譜読みができる学生までもが楽譜に忠実でない演奏をするのはなぜだろうか。この疑問は、長い時間をかけてようやく解明することができた。授業ではいつも練習結果だけを聴いて、各々の学生の注意点だけを指摘して授業が終わるといものであった。この指導方法に大きな落とし穴があったのである。練習の段階で学生は楽譜を読むことに注意せず、ただ耳から聞こえてくる音を感覚的に捉えて表現していただけであった。4分音符・8分音符の違いを指摘したところで、その意味すら掴めずにいる学生の姿に気付かず理解を求めていることの方が無理というものであろう。

ここに挙げた問題点について、今後の課題として考えられることは2つである。学生がしっかりとした譜読みが行えるように、先ず音符についての理解を深めることである。そして2つ目は、学生自身が楽譜を読むということへの強い意識を持つことである。学生の中には楽譜が読めるにもかかわらず、適当に演奏している者もいることから、指導者の学生へ注意喚起が必要と思われる。

今後のピアノを指導するうえで、この考察により学生に投げかける問題点と、指導する立場で考えるべき問題とが明確になり、新たな課題を見いだすことが出来たことは大きな収穫であった。

引用文献（楽譜）

- ・木村ケイ編『指使いつき バイエルピアノ教本』全音楽譜出版社
- ・『ブルクミュラー 25のやさしい練習曲』音楽之友社